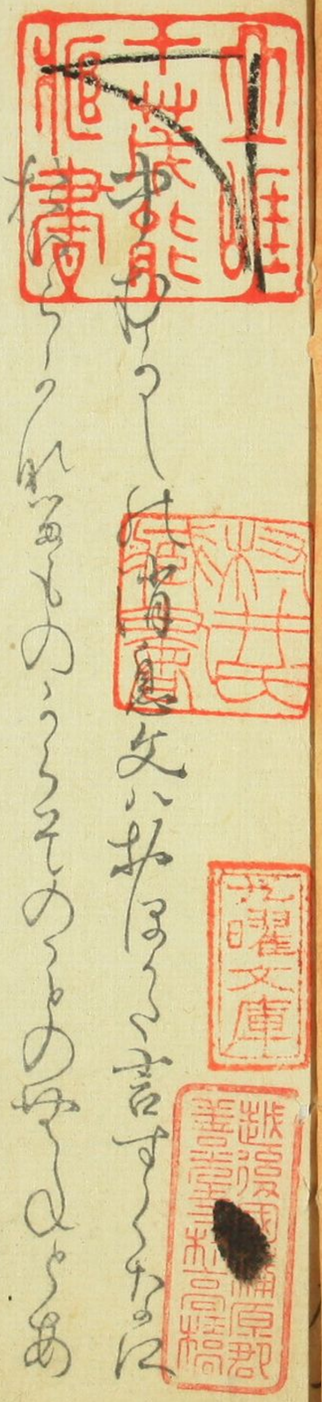
紫文游樂

全

明治三十年一月十五日

山岸十茂能君ヲ讃ス

田中一貫



文部ハ言ヒ難キ

[illegible]

[illegible]

[illegible]

きうへひをてそかくまんまのてすてをわさ那
ちとをれさをえ中むしのをのうわさとうと
れ春のあ那ー　これうらわさて此をの後をま
ゆくとあしをうをてようはのようてあ
ふをとの中ふをひをの後なあて言葉も何し
うをかのうすうしていうめてうれなうう
をあらうふて文花の四ををうをーのを月
のサヨといふ。

源稲矢

一此書をいふ〳〵世消息文をよくも見てしらぬう
ひよりぶの人をもちはうあにのうをてきまぶ今世に
きうをかうしぬ言葉あるを注なくてきうをうかぶうき
所くうをつをこのかうをうを注をはをうう世注
を。先達は注をよりるをありまを嘉師は考に
よしかるをあり。まをおのずうをうをて。はて
たるをあれどもぶをくをうを注をにあ〳〵まを注者
乃名をとくぐををうび。
一物がうり世言葉をつなのをてはをひをはをも。
こ異のうをあしをぎうを世をれたのひをはをにより

て注をかきたり。さかぎりてみだりよみけるに。
なげむべかりけり。
一本文は。今本に異なることおほし。そは所校本
は。一一さいよりもとかを。今本にしたがひてあらし
めべかりけり。
一湖月抄などよみだりよみ。余の一ぬ文に。少にて云。
を。余は。ばよみ。俗本をかきたる。文あしかりけ
らしかきことをみだり。彩ることを。別に。ことばよく考
て。のりけり。をぬ。ものよりてきることをのり
ぐを。おは点をのくること。句讀清濁。假名

ばのひなどをそ。あやまれるをしばらく正せり。
一文ごとに。下附をまるをせるを。本書によりて。消息文を
を考合せ。ものもあり。
一引歌は。今まるのにを考へ。まことをとより
あしかざるをたは。まことにそのに考へらるべきたぐ
ひを。誰をよくとみてつべたる。古今後撰などれら
なのしかを。ものく出所をまるはとれし。
一本文にて。しは。ものは地の界。消息文草の
大さ。のりまこと頭書に。をまるをそ。は文の
をまるこをまるを。文のれ。れ

注なり。

一帥宮を考るすべき光明寺奉拾篇の説なり

桐壺 一丁○桐壺だいりのこれ注文○更衣は女御かつて事 篇木 空蟬 夕顔 日丁○うせみ蟬君注ふこ

○源氏君注五事 ○あまぎみ注五事 ○源氏君注文

○わなゝきみの注文 若紫 二丁○源氏君注文○わなゝき君注文○少納言が五事○きゝ女の僧都注文

末摘花 五十二丁○源氏の君注文○藤壺中宮注

○頭中将注ふこ 紅葉賀 四丁○源氏のきみ注文○藤壺中宮注

かつて事○源氏君注文○源内侍のふこ

花宴 葵 日丁○源内侍注ふこ○げんゝ君注ふこ○六条注息

所注文○源氏君注五事○わなゝ君注ふみ○あさ

がほの斎院注ふこと事 榊 六丁○源氏君注ふみ○わなゝ君注文○たゝり君

注文○中将君注ふこと事○源氏君注文○同君注文 花散里

須磨 八丁○源氏君注文○わなゝきみ注文○五命婦五事○げんゝ君注ふみ

○六条注息所注文○源氏君注のこと○薄雲女院注五事○朧月夜注ふみ注五事

○五節君注文○げんゝ君注ふこ事 明石 十一丁○紫上注文○源氏君注五

事○同君注ふみ○あう坂の関 澪標 十四丁○源氏君注文○明石

紫君注ふこの注かつて事○源氏君注ふこ 蓬生

関屋 十五丁○源氏君詞文○空蟬君れうり事
檪 同丁○源氏君詞文檪ゆゑ詞うりこと
○げんじ君詞うりこと
螢 十八丁○兵ゑ家詞ふみ○玉ゑげんじ君ゆゑ詞
野分 御幸 十九丁○源氏君詞ふみ○同じ詞ふみ
藤袴 廿丁○髭黒大将詞文○兵ゑ家詞ふみ○兵ゑ
ゆゑ詞ふみ○玉ゑげんじ君ゆゑ詞
真木柱 同丁○髭黒大将詞文○兵ゑ家詞ふみ○源氏君詞文○玉ゑげんじ
ゆゑ詞ふみ○髭黒大将詞うりこと
梅枝 藤裏葉 廿三丁○致仕のたいじ詞文
○ゆゑ詞ふみ○
若菜上 廿四丁○源氏君詞文○朱雀院詞文○明石入道
○藤内侍のかうりこと

絵合 松風 五十二丁○泉院詞文
薄雲 十五丁○明石ゆゑ詞ふみ
少女 同丁○源氏君詞ふみ○横笛ゆゑ詞
玉鬘 十六丁○源氏君詞文○赤橋の花君詞ふみ
胡蝶 同丁○秋好中宮詞文○けんじ君詞ふみ○玉ゑげんじ
初音 十七丁○あふみけさみけ詞文○けんじ君詞ふみ
常夏 同丁○あふみけさみけ詞文○中納言けさみうりかうこと
篝火 ○玉ゑげんじ君けさみけ詞
行幸 十九丁○源氏君詞ふみ○玉鬘君詞
真木柱 同丁○髭黒大将詞文○兵ゑ家詞ふみ○源氏君詞文○玉ゑげんじ
髭黒大将詞ふみ○すゑつむ花詞ふみ○げんじ
梅枝 藤裏葉 廿三丁○致仕のたいじ詞文
○ゆゑ詞ふみ○
若菜上 廿四丁○源氏君詞文○朱雀院詞文○明石入道
○柏木君詞ふみ○小侍従のかうりこと

同下 廿六丁○源氏君詞文○朱雀院詞ふみ
君詞のうりこと
横笛 廿七丁○朱雀
院詞ふみ
鈴虫 同丁○泉院詞文
夕霧 同丁○ゆふぎり君詞文○落葉宮詞母詞息所
詞ふみ
柏木 廿九丁○柏木君詞ふみ○女三宮詞
うりこと○かしはぎけさみの詞文
○ゆふ雲君詞文○雲井雁けさみけ詞ふみ
○ゆゑ詞ふみ○致仕のたいじ詞ふみ
○ゆゑ詞ふみ○
世三丁○秋好
中宮詞文
幻 匂宮 紅梅 同丁○紅梅
右大臣詞文
竹川 世四丁○薫君詞ふみ○
藤内侍詞ふみ○
井雁君詞文○夕ぎり君詞文○藏人少将文
○あねひめぎみけ詞うりこと○藏人少将のふみ
橋姫 世五丁○薫君詞文○大君
詞うりこと○薫君詞文
○故かしはぎけ
○ふみけ詞ふみ
椎本 世七丁○白文詞ふみ○八宮詞ふみ
○ふみけ詞文○たいなごんけ詞文
総角 世八丁
君詞文○大君詞
詞ふみ○薫君詞文
早蕨 同丁○河園
梨けふみ
宿木 世九丁○落葉宮詞ふみ○
中君詞文○薫君詞ふみ
○たいなごん君詞ふみ○同君
詞文○中君詞うりこと
東屋 卅一丁○浮舟
陸奥の筆中将文○浮舟君けさけ文○浮舟

君れのうしと○たなぐ君れ
はしれ文○薫君浄ふみ　浮舟　四十三丁○浮舟君れふみ○右近文○たなぐ人文
君浄文○白文浄文○薫君浄文○大宮浄文○薫君浄文○浮舟君文○薫
○ほけつ文浄文○浮舟君ふれふみ　蜻蛉　四十七丁○浮舟君ふみ○ほふ文ほ文
○小宰相のふミ　手習　四十九丁○小野尼君ふみ○薫君浄ふみ○浮舟君ふのこのうを
のふみ○れ人文○中将乃ふみ○ゆまぎみのかうを　夢浮橋　五十丁○小野僧都
○うをる大将れ浄文

目録

小萩ぶみ

桐壺帝　みたまふ〜文ふれ母を。まうひ浄ふ。

相十二丁オ

ほのかにぞすこうちまぎるるくてこそやとまち子ぐ月日
こよなくいうへくぐいとしぶびぐこ　たべるまこと
少　をきるおよ人をいのにはれたりひやり作。をうとを文ふれ母こと
ぐ〜まうぬ母ぶとのふをいまを母をのしはの　文永
ものとうにるぐすくへくう　若文を見〜まうて本内〜ふくうふこと
かうせたまうう　たまふまぐこまのに

文城乃ふ京文ぬすぐ風ぬ君こ小萩ぶの女城男ふ〜を

師云はぐでまぬのこ
にのう〜女落せり
又おぐつの作ふ
うぐ人ふれ語なる
ぐ。

ね　ぬ　の　は　ひ　ふ　へ　ほ
うるん君のうも
吾ぞますれい
けるこひをき

更衣は母御のてう

円十六丁オ　恐をきうるん
いとをこがるとけるきもあだなき所を侍るぬ。こがるるなかせで
とにたゝそ見のきくるしみぶりごろにるもん。
（更衣のるが出さんてかるを見れ侍るを歌くゝ名問ふるトと上ぬくゝ）
あるまに風ふせず陰の柱より小萩がとゞしぞ心ぶき

空蟬忍（源氏ものがたり　おひぬるやこゝろまゆ　ちまや）

円四十七丁ウ
うけまはりあもむ城ごとこつでゝ見えこゝろ。
（こゝろとけぬをかたにのること）
はは城を見ぶこうれとはでばぎ心るるいのばのりかき
かりひみぶるゝ見まずぶ見まゝとに立ぶとまこゝ見とり。

源氏君御こゝろ

上円
いけるこひをきや誰ごのいとをもゝ
（上ゝこゝろ以ぶごゝとあるとてまこゝ）
うけぬせ見れ世をうきのとを見ぶ城まこゝ見れとよ
こゝるいのちよぶこゝのは心ゝ。

源氏忍（おばの妻と人女にだぶ一妻逢まひて）

円四十八丁ウ
君ひこゝろ「つめるほどに見ぶる見ぶりまゝ」ぶりまゝ
ぶりまゝ見ぶりまゝ
ほのぶに定軒ぶれを城もすぼを君あれのぶ、封侍はのける

同忍（紫上の幼少なきまゝ父をなくめて。其川祖母尼公にうれひる。）

紫廿五丁ウ
ゝをくはるまゝてゝりしみぶらきれけるまゝ。れるもし
紛ふるをる城ゝをゝあらはゝとて侍ゝ歩ぶりまゝ城ゝ。
（城を見ぶ侍るゝゝ川ぶゝゝゝゝ）

上円
（所云云にゝゝりゝゝ
ゝをゝゝゝをゝ
ふゝ河ゝきゝゝる、
ゝきゝゝゝゝれ
ど。）

師云うばらの下の歌。

紫上すでに成さなりて、春のひを春のくれしらぬ心ちあるはかぬほど何まもうひうと。

かぞりさこゆるいくるをぬ山井の水成。
はるんぢもつまぢのいのいうまつ山ぶどりの中いち氣
さくびさもすびくく。

面影を身なをはるをぢ春をぢ人せのぎりとめく
しのぶ月ぬ間せのぎをうしろめたくぬ成。

尼君陸奥ぬ

（同廿六ノ十オ）
ゆくすえ乃しるを。ゆくさの対く
ふりもつくを色ぬ人ぬ山にまつて春せむのうるくるぬまぢ
紅波清ぬ成ぬ。ぬ成ぬ成ぬ成

うくれはせぬ
ゑ八云〻山寺にま
叩渡る度に
てゝ後でたゝあ
けて〻〻さに委
しく八中あげぬ
ゆゝとゝばゝ
さゝたること。

同世四ウオ いそけるさ手ぞ乃一枝おくよりあまこ白げ地
舟ぐしるぬ「ぬ」ぬ「ぬ」るぬ八まや。

少納言ご文ゑりて 北欠八尼君れ逸すゝりて。
お納言ごゝけるゝ。

上同 ゆゝ七世ゑるきけ花を見ずぐしのゝけるさまにて。
山寺にまこりわるかどにくゝかゝゝれはせゑへるこの御
こまりきゝせゝるゝでえまゝてさせ地。と云り。

小山伽於 尼君ゝうきゝゑひゝゝ。
伊氏ゑへゆゝるゝ。

同世五ウオ たゝゝめる用れ世れ
まゝゝゝてゝゝ北ん道理のだゝりゝまゝどゝかゝゝひ四ひゝる。

紅三ウオ 源氏ゑ院れ試楽に青海波をまひあひく。
いのこれゝんゝけゝゝよにゝゝゝぬみゝりゝゝらしゝなゝゝゝゝう。
表れりれ立ゝゝふゝゝゝあゝゝぬみれ神ゝゝゝふ立り
ゝゝゝゝゝあゝゝゝゝゝ

わられてあはるとひしき潮にうるもあはるかりぬ袖おもんぞ

花にさそはれて思ひあまりて、ひきさせて侍りぬべしとあり。

源内侍 此二行の清基の事、長はまばらもぶ。

日廿八丁ウ

うらみてもいつの秋とかたのびぬ立うきまひきくうりしぬの

ぬぐりにうるこえあはにはいとうり

頭中将

日廿九丁ウ

君にのくりもらるもぬるれびるまばらのうてをぬる中比

うらうらんえ共のもしらしたちぬ」とあり。

源内侍 源氏公基上と同車にて祭見に出たりにまゐりたる女。

葵十三オ

けのの川やんせのぎるあひひ公神社をるれば

くゆくぐくくくくくめくくくくく

ささえ又はどを。
海賊のこよみまた
りにようぶつうぬ
こうぶ女の詞こと
ある様なり。

おがろけつまやさ丸れのつ
ゆり（ゆれぼろけるのにて高貴なりと故こゝにまりてえきこうぶせ女のことなり）
えまり抜いてき葵上せわげ（ひたおろけ）で言てげけ女ぬるをまりとより。」

六条御息所 葵上せうの母なるにより源氏忍をゆふしれたまふ。

（廿九丁ウ）
こゝてぬぼるこ
人世義新とまくえ
たぐ合せて名八字まあまりてなん。」

源氏忍御ものりて

格別なる忍 月日のほとゝぎすこゝ
こゝまりうぼ
あ御中丸御ものくを悔あるこ
ぼ
ぼ
ぼ

はるゝく

秋ざりてたちかへるこゑを聞しうゑでる所を見ずとぞ

源氏忍 秋好方に参り給ふ。伊勢に

神九十オ 口にゝはせやき可畏に前ゝ

このけるゝ所をうゝこきたれ給へに見ていふにつゝて

うけのさこ

八洲をるくに〳〵侍神を人間ゝ思ふ人別れ申ける

ゆくわきぞふひかりつるに。あるにあるかぎりしたるかぎり。

円忍 二三日雲林院にゝ参り給て

円三十一ウ

口ものうことゝけるゝ紫上につゝはしける法文

さめがそうぶぼうさまをあるに紫上たること

ゝりくやゝ〳〵ひ給ふ。ゝ給ふ。

ゝのみにうちゝけ。この歌ゝ〳〵ゝ

はちゝ〳〵ゝ〳〵ゝ〳〵

りうこうさぎきのにそあるあをどりうこうさぎきまれ
ゑんぎのやうにそれなりをすゝちをひきとく。

中将忍れ　のりくて

ロウ
ア　ぞるくことしかくてぞ。さこうこれ事は思ひ寄まへ出る
ぜ　ゝ　ぬまくにを。源氏君を思ひやり寄えさ。すんことおもひく
はべまどうひかくうこなるとすてしんとゞめて
おちこり。桂ハ　おまへうきぬふれうをはか。
うれのこやいぐをあしゆだすきんにかけてあのがん
少ゑ。ちのさ世にとぞある。細流にちのき世にとあるこの手本歌ふちち
源氏君　今ゆのうれにたりたまるゆて。

ゝうこもろうて
おめるゆくゆの
りぐがハ花のに
きがひり

ロ世三十四　花の東ゑにまろうまひ
いくせゑ人ゆ久ゆ城めぐしきこゝうけあはるに。
寺に侍て中ゑ東ゑ社宮ゆ
あ人ぎれとぐわぐへう
とあむゑ思人なち侍ー日ゆず城ゆ。ゆぐゆ。れこゑ人をつ
なゆ。ゆぐゑにゆり
ゑうう思ひさまふま
あへ。ゆぐあり。

同　思　勝月花君ゆ
ロ世八十ウ
ゆゑゑ世て。この人。細殿ゆて又逢ゆて。花とゆれて。宮ゆ行ぐ日ー寺ゆと
おにゆう思ひなりうぐ
をまにゆゑ人ゆ歌りのごりにうてたげよくづ
身はこりのう歌ほぐよて。

あひ[illegible]ずて志のごとくは乃洞穴を出べてら秋乃時雨とや
乃るぶれのまふ[illegible]ぞ。のに紅のあれ[illegible]も拙わすま
し。[illegible]ん。[illegible]どこ[illegible]まやのにあわにくり。

須十五ウ　同月　聊月紅れ君の[illegible]に須十八ようたひまけんと
世のこと[illegible]
とはせ紅を[illegible]こと[illegible]に男ひ[illegible]へ[illegible]ぞ。今はと世ば
[illegible]
因ろ[illegible]へ[illegible]ぞ[illegible]ろ[illegible]ぞ[illegible]ぞ[illegible]ぞ

けるかるべし。

さるとく菊ふうはまぢの裏に花の松ぞ試さこの月見とよ。

とゝもしあしばとゝ山

いかにとく刊行にも及まじきこと

同 忍

月廿四丁ウ

松しまあはあまとてやとゝいろ彩んすあ浦人志はとゝ

こゝろいけとゝ侍しぬ水に見ぶのこのゆくさぶらきて

ちゝみぐさをるさりてなのも。

同 忍

月廿五丁オ

つけくを。

おのずあ浦のみるめのゆとの城垣やくるまやいで出さん

薄雲女院御ゆりと

月廿七丁オ

これぐろそいゝぐ

志ほるゝ波やくゝくに松島にとゝふる海士もなぐさぶ

月夜君御

上月

南に出くあまぢにつゝ京あまぢゆるけつの方に解き

とゝもしるゝぐ志はあまりうゝ

さゝゝ月ゝゝぐゝを思ふなんとぞのり。云

六条御息所

六条御息所伊勢ものがたりに源氏をたてまつるまの
のすまのかぜにつけてひまなるのこと

日廿八丁ウ 源氏左遷故ありくの人

おぼろけにてはおりたちまうでくらまし。ぬれたるひぢう
ゆめみるをめはけぬ和の八重ぶきのさわとたのむ。さはあるともこゑ
きくやこそ袖ぬるべきとくし
ぶし一月にてつくねすどと思ひやりつるさすがに
こをいとをしくこの事見たてまつりまうしまうしたまへ
今にや文をかよはせ毎度音信しつるきゝかなる
こともはるこの月なるべけまし。

うき我めのるいせ海の海士を思ひやりをはるるすがた
浦ふくかぜにつけてたをひきまつるべみるる世なり
さまをなをいのるよりはつべきてうとかるこのうり。

十

ゆくさすらへべき
身にあらくうもと
らば同じくは所
の供やうして住
へ下向すべきもの
をとんぼうきを
思ひ八なずるこ
きこゝさへ見
ざるは思ひの入
きこゝさへ見
るのあるべけまと
て切うけてただ
も再會祈りづ
たきんと湖月
抄にたり。

日廿丁オ

いせ一ものをもひけ方にあきりて見いつのひゆき八我身成り
源氏思ふ御うくりこ
うくて世ゆをるべきみと思ひまつるへらまーこばれる
じうをもひおこるーをはをいどあんとてもとよ
ふぼうきこるに。
いせ人は波うつぐ我舟に乗うきあいうーでうまー物を
あまのそはは海ぐきれかはれくはけるでまは蘭と
ゆめもおこさせもとはいつとを待ぬそはせぬ
こゝらし待ま。ゆどぐ乗ける。

いで吾を人見てぶあう大船のゆきのたやさに相ぬ
氏

おもひまやひまれわ
わるまにたちへ
あまの釣をきき
いさうやんとを
きてだよ紙ふ
たゞることれさる
るに出ぬにて元
さにとげるやう

又節・君　又節代及はてしうち・まつはなるはそぐた。源氏君の舞うまわしせてること。

日世八十オ
これはこれにひとあるもはるでなんまはゆふんぬまる
らあやすきしまし。八あとがめて」と宮えてり。

源氏君御　うてりこと

ハウ
人ありて出てれつ月のもはぐらすぎるやすま
れうら釣ぐいさりせむとまおりはぐらしてやとあり。

熟食の行く

紫　上あのの舞　明三十オ
すまの物やりもひまる御
あさるしくぬやうれ。ふれ。ふうんとげる
こうらして。ものがめ御はこの世を釣くるん。

に思はまてはなのはるとやうもみしとと。

やうにはぐつ
あきまにて、ぬ
に紫上に対面せ
ずしてや世を捨
てんとなりて、
さまくるはる
きとく、

このくさすらつ
まれ美れやうに
なりはるまぬ
美れやうなる

浦風やいのにおくてふんおりひやる袖うちぬしの釣をあ法

源氏君御　うてりこと

日十三オ
うへすくいそ。左選してきまりのうきあをこかしくそ
さてるおまばいまいとよを思ひたちるくんはこるまさり
侍までこうぐみをこうくえどの世まひ一面系のそれ
御とよるまさ、我このくれがつこのみ仏ぐしやとこうらかる
しよさるしはうまちさいかしれたのまてく。
はるのにえいおりひるのしはあるぐしり浦ふりをちに
うぐぜきりてて。愛れうちるこうらうこうて。

こうきゝ女さまがいつにひごろとしたなくあんとゝ

朝ゆかを歩む事ゞきけよりも色に出でとわるひゝぬを

あすゝ恐多き五文字の国舎ぶりなるんなんなれ何うゝゝまうきしくの思ひ余りぬるゝ文ふ娘ふるふる及

さぬはるゝぬかゞいのにひがゝとれやこのん。

同 忍 あり此上につゝはけるけるゝ沿文

月廿三丁オ

なるらもるゝ走ゝぬ雲内にるゞめわびのすめやどれ

本赤をゞゝゝ小男ふに「ふにをとばのりやありけむ。

明石入されのへりゝく 明石上にのぼりて。うけるふゝゝ。

月廿四丁オ

しゝゝ走のゝゝきハぬるゝのびゝく侍ゝ中ともにたゝゝみ

あるゝりぬるにやさゝゝに乃折ひをれのび侍ゝぬのし

こさゝてあむさるる中。

あゞのせゝんむゞ雲内城あゞのれる思ひを行能じ

ひ侍ゝぬ其

まゝにゝれん

怪ゝゝて八尺

この四ゝ中ゝとゝとゝゝゝ

まこもあやしうあるに。明石にめしのぼりをけのあるりまして
あかう冥のゆるかぎりは夢ばかりこそ侍りし
ほどもそがあはせよかしひしことこそ。
て。例事につけくこそ。
志ほしとぞ。るかりあはせまじるかぎ
紫上御こうりと
志けびのまゝにまかるに夏ごろにつけくこそだにあへ
ぜらるゝことおほのるにこ。祝ゆかるたゝなくもとかにつく
うらなくも思ひけるかれ変りぬ城まつのうら浜さてあるべと

志ほしとちひしらず城あるまゝバ三ゐ月の山の神もこゝろあまさ

こゝろ〻こゝろ〻に治
まあれば変かゝりに
いつけてそ世本
情のあるくし
さいひもあはせ
らるゝこと〻〻
るべく〻。

十三

源氏君 明石にくらしあるべく〻。
四四十三ウ 波はよるく〻いのに。
ぶかきあの浦のあさ夏はさまと人は思ひ分られ
冷十五丁オ 君 明石君の五月雨に。
うみ松や時ぶとこゝ分ふ法てのくゆれあやめいのに
わくらゝ人はあくるまでなん。あやうくてをこゝろすぐに
すぐき我思ひ出ら紛紛さりとをうしろめたき
こゝはよもどのいとをすくりの。
明石上御こゝろ

ほくなくあれ
ねとくだりてえ
すくがけまこは。
さもく上洛しまく
あるかすくをは
考うしるのこと
うゝるをかせ
しく〻。

四十六オウ
ゐずがの[illegible]
同人ぐ[illegible]さぶろうば
城。のくなまさろ[illegible]
すのの[illegible]ばと[illegible]
[illegible]
[illegible]

四十七オウ
源氏見[illegible]
[illegible]
降参[illegible]
同 見[illegible]

四十八オウ
一月八ちぎり[illegible]
わ[illegible]ばよ[illegible]
[illegible]
[illegible]

四十九オウ
空蟬見[illegible]

五十オウ
逢坂[illegible]
わ[illegible]
明石上

薄五十オ
よろ[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

かけまやハ川瀬ハ波をあらのうまごみそぎはらはせ

槿斎流師匠うつりこと

ふぢ衣ぬきはなれ　ぬきはなれ　ぬきはなれ

はつ無ばなのかくしばのうあるぬぎ云々

源氏五　ほたるぐれ　ほたるぐれ　ほたるぐれ

うくいすこゆるぬぎ。

ちぎりをもて　ちぎりをもて　ちぎりをもて

未摘花五　源氏ちうの花ぐるまだから　うしけのちうこと。

日四十六ウ　人数ちうまて　数をゆつりをもつてちうこと

いでやそこつくるまゝ　ゆくいてこそ

ぬぎてみもぶらうをもまつりから衣ぬぎ　やりてむ袖をあつて

源氏五　師匠のうつりこと

日四十六ウ　うへさんとふにつけて　衣ぬぎ　思ひこそ

やれとわりやそでぬぎあめる。

明石ぬうく　姫君のいと方に子のひけと格破子ども　なりたちふとそまりのせけるつめ。

初四十ウ　こ月ぬぎ松にひかれてくふる人にけ人當れ　初さきさうせよ

おくせぬさとに　ほれさとにたりめまて

たるつる　ぬぎはあはるてこれ

ーー志ぬ。

秋好中宮　紫上の花がのこ胡蝶をこやとのまひ

ぬぎはーーけるはーーこそこと。

げにぬぎたるものぬきあはせ　おとせぬ里ハ住あひもなし

胡九丁ウ 咲只杉ノうき船見ていたりまつ山にうまれ

よけ人をぶ者に有まめぐくしそ

胡蝶に義さうはまを沼るゝんあり天八重山吹をぶぶぶぶぶ

源氏見（おろ〻見きこえけさうをほるめ）

四廿三丁ウ おろ〻見きこえけさうをほるめ

たぐひあるのりしつはけ〻きこゝろぶ〻わすれぶ者

うぐいすに人見者りけん。

うちふけてねもぬ見ぬ者ぶ者ふけのこゝあるぶ

むすぼるゝんぶ者ふくゝるぶ者ぶ

いぶのに云〻

玉鬘巻 陸ゝうこと

めゝはぢらき船ゝ

ぶ者ぶ者ぶ行ぶ巻

ふ船ぶもうはけ〻ゝ

と見ぶ者ぶくりとけ

ぶ者めゝ。

四廿四丁オ

うけ者ぶはりぬぶ巻ぶ者ぶ巻ぶ者ぶ

ゝ者ぶ者ぶゝ者ぶ者ぶ云〻

兵部卿宮

宮 三丁オ

ぶゝうぶ巻ぶ者ぶ者ぶ者

近江国

常廿五ノオ

あしのきはおぐらのきはにさざなみのよるのかぜ

でのげにさばのりはもぐるもの侍ぬ

をやすたさ勢ぬひけんとるもまもるもの

鄙といへどのしこもあれのこもやしこ

むらちにくぐつにもぐるまにまにまわりこ

人と思ひあへ手をこそ

こでやしあやしきをこそ

しにのくで。

ミヤ川の大川の

此反歌のなこそ

思ひ音ぬあやもと

ちの大川の水を用

替まるしちはき

りにかりそめ氏の

くとそ。

草わかうひ草ちはのいかで此いのでもあひもたど

かうらかくらかのは水せ」とあをさまをまつ

ねこ云 師走ちはしはしはし

玉のぎりとれたる所をうてること

昨日ハ。

うちまうしあさごろまでゆきにまさまやこのこの
光やを見しかばつのかるをけこぐをにまも。

大文（内大臣のまへ一七文）

六條（十四テウ）（ほそどころ）れたるぐせとうしひとわらひ（大文はゆかた）称つるをこそさび
しげな侍まぐハめせとうしうまぐけうう（外見まくハ濃紫の色なれ人もすくなくとうつり）
をあるをぐとしうう。うまとうまとうまとうにを
あるでわうるひるんや。寺（野面）いめんにおとこまはし（大文ようく安産はあり抜ハ八ありぶ一てとうあこ）（ほのぬ大臣ハたきさまもあり）

げのまへよく
げあるこゝを見あるまりしりとおこて見うり。

同（玉ぐしげ丸君は山吹業者の品ぐ一は箱ぐ。）（おうとうまとうぐ）

（十廿二テウ）
きこてゝもに見いまし（たにそまう一まを）きさまるまをしげいやを一はび
こあ侍まてゝ。（たけまはまるとのまを）
（たけまはまるとのまを）
むがしゆくひぐうを（今は長きたけ伝をしまくく）見ぬ。ゆまはまるにうけまを
はりあまゝあたる（むうまを大文は伝ようまはは）すぐうは紙ぐのけまをこざうん見
いうぐうはゆしまてまるぐひくまは。
（うくくまをもはは気をにしまうひくく）

めううた言をてゆだ出ましは我身はまるまぬけ伝ハ
未はむ子はまをけまて（玉ぐしげ丸は業ぎくは表くく。なりまをこぐうはゆしまは文。）

同世三十才ばかりなる人、自らものしぬるけぐしてもの
ぬぎ、せたるふべきさまにもあらず。侍ども、ねぎぶてしたるけ
うぶをりをたるもの、こゝろのもとなるまゝにかすめるぐうこゝ
ろ。いとあやしけれどもいとやうなる人にもやうなるこゝ
ろ。いとあやしけれどもいとやうなる人にもやうなるこゝ
なり。云こゝろ。

ぢぶ所あり。

春ゆくこゝろ

源氏君佛に

同世四十

あやしうしれぬ男ひとりあるるをきかんぢ人こそてさこゝて
うゝて立て歩すりいるをとゝとゝり
立ぬぬべきこゝろまこゝにくさに、のさ祈ひく。

二十一

このゝ衣をまこゝかゝ衣るこゝろもかへ式くこゝかゝ立ぬる

鬚黒大将

鬚十六才

程をはこゝ立ぬこゝ

ゝ立ぬ

ゝ立ぬ

ゝ立ぬ

鎮西大將

（県本十六ノ十オ）よべにたるのにたきしいるくれ侍里のより雪はけき
をこりつぐ〻つくやすし侍里に身さくひえて
ねんぶつこゝろ球ぎさるもけるくへいのにとる
をぐりけんとおすこにてのきたるる。
ふさこをにぶれ雪も粉よひとさけ方のもきれ袖
無紀の文
（河世十オ）みやまぶにたるうちのはするる鳥はきるかくね
きよ妻にををこうかさ〻ぼる新もみくこがきて

なぶぶぶ。

源氏忠

（河世五十オ）かきこれはなぶけきはの妻所よふるきと人をいのにし
はぶやぶまにうくを。うめう四びいぞうる
こるれやう侍ぶ成。いのぞ。のおこゆべこの
玉。のぶこれ石陽。のうこ
（河世五十ウ）ぶのめするはきのちぶに袖ぬまてうるうの成
はぶぞこめやぶほどふるるをぶるるつまを
まきう侍りぶ。ぶりこぶやしこのき

思はずるくこゝろ
あまりの野まをうち
かへ恨あぐるの外社
まゝまゝ女とゝぎ
ゝとゝとゝとゝぐるぐ
ゝゝ

あつたまつり。

又源氏忠よりの

同世七丁ウ
おやけの御き月日長かとまりめる球。れりちずる
源氏の
御殿をくゝ御ゝ御
ゝとゝうゝゝきこゝゝ
ゝ長ゝゝて
ろひとゝゝまゝゝる
ゝゝゝゝ
で御ゝで忠。對面れのこゝゝんをゝゝちをゝゝゝ長
ひたまつゝぶるゝゝれゝゝゝゝゝゝゝゝ。
ゝゝゝゝゝゝゝゝ

吾病のふぢ成ぐ
夕雾忍
日十二丁ウ
はもすぐ〜宮井のほとりうしろ
はぎ成ぐ
みれかど成ぐ
ぬ
日十六丁オ
ぬ
ぬ

惟光の娘蔭侍
侍
侍
侍

師云時去おをよく
君こうしもとの
風のさはる〜

日ウ
特士
菜上四十五ウ
病
病
病

うもおに世にうるふこう人品路はやでうけまつ（はなをおぼつめすし）ゆるぞ式うたるけで宇ゆるえがこ（ぐ）のまーるや。

うあり。

明石入道（明石上にまゐらせ。遺言はかうなり。）

（日七十九丁オ）

こはこ世を。（日世にをるあるべし）世中のうちにめづらし侍つるまで。

（あにこの世にあるべきほどくあはれまるべきものと思ひうけ侍りしに）

（ものこのはかくたのもしくしるべきるあり侍りべし）

（たびのる伝もなべし）

（しるべきこのぎりもをまこうけ

（借字文は羽やきりのゆ名陸れ入ゝゝゝゝ）

あはーぶ。このれふこ見給ふるもめれいるるいりて。

（ブツ）

念仏（極意）えばべすう（益無）やうにやくるてあんいはやう

（息）

こえにまゐりあひくぶ（雑れ行服たし）ゆるとこ笑きるるまり、ば

（人ゝゝ）

るんあーくよろこびて侍る。其ゆゑもこはるかー

くはをれるを。山ず（北家れし）れ月にいるるにこれ世のさの

えれれりよはを侍ーぶるにー方れとーぶ。ふ

おるしれく。六時れ（明石上のうし）れはとめにえたぐれ（明石上のうし）れこるに

のけて。蓮（ハナヽ）れうれ秀のねぐひをぞーー空（念）ん。

絶ーぶりしぶ。吾れりとうるまたまるんとぶ。

れうれ二月（キサラギ）れ其れ夜の美にうーやうぶ（ムラ）うう

須弥山

すゝけ山ぜんにさゝげ奉り、山れたゝ在の月
日はひゝうりさやのにさしいぢ〳〵世ぜてすぐぜの
らを。山れしえれのげきうまでぐれひゝりにあゝ
らぐ山をぢひろまゝ海ようこのべたきくちゐさき舟
にのりゝ西れうぜきてごぢりとゐ見侍
爰さめくあしきうのずれゝぬ身にをとれと
ゝろ出来るぐのゝ。何ごとにつけゝこのさゝいのあ
きゝゝ世ぢをちいぢひどれうちにおりひ侍り
ぜれれはりはゝゝる社行ひまゝこゐゝぐくれ方

明石上

侍書ゐゝ

れゝゝ世見侍りしに是ゝ内教れゝゝろ世弱ゐ
中に夜ゝ夢世伝ずべきゝと多く侍りしゐぢいや七
きゝゝゝれうちに夜。このゝ山ゐく思ひゐぐぢよ
をりしゐぐちのゝれうぢぬ身にぐれりひ行べゝき
てなんゐのゝる道にれゝよゝれ国乃
ゝゝにしぢゝ侍りて老れるゝきゝに立ゝのゝしと
男ひとゝれめて。代浦にゝ世侍りほどを。わゝの夜
世れれむゝとに物りひ宇ゐ侍りしゐばゐん。ゐひ
とゝまれゐれ形をたて侍り。生のゝりゐだひ

近本中わをゝく補蓬生にうしろ

カ変身に思ひまゝてゝ

明石上を

水草きよき云々
花名に云寅僧
正宗入時のこと

らこに四ひけど時にあひ行ふ若さこ國けたてと
（頼ゑ立てこうりし）
ゆうたるとくねこひこうたるそんよこすこすれ
（頼ゑ立てこうりし）
清社をけこめはてーもへさこに何事ぞのう
（姫君東之に糸正たまひて君之に送まる之ゑ八けく殺八けひしと）
たこひ侍こた此ひとつけこりひこのき世をこの侍
侍ぬこばるこに西せこ千万住れ國へこく
たるこ品けうへけのこごうこひるく成侍りぬ
（未近引橋とまうこ）
きこ今きそこたうるはこ武城こらこるこ程
うけいよこるこ水草さるゑ山けホにくけとめ
侍ーんくくるんまこりいりぬ。

ゑ四八水草き
より末もげきに
の内八すまずま
さりとゆうこに
うまこりとこり

ひこりいでん晩ちこくれにけり今ごみーよけ夢ごの
（八ゑ八）
ちりすこて月日このさたり。命をはーん月日こ
（古より定こそのを武縁にこく）
らにるーこるもりすーへより人けこめはけ
（死去けをゑこゑ八ゑ八ゑ）
（りこ服をきけ生ちにも及ぼ出こ）
こちのこるもに元ゑにこのれけきゑ吾身を。
変化りけと見ーこるこ老（おい）法沙けこめるを。功
徳をにこり行へばしよけきこりこたうへこを俗世
（極楽界）
けわすき行こる。ねこひ侍こ所ゑこばこりこ侍り
（彼岸）（婆婆）（対面）
ゑこう彼こずこめんを侍りゑむこけのほの共
彼岸
ゑにこりてこくあひみんこゑけこけこせこて

この社に参りたる所文どもを紙(ハ)大きなるをんなん(女)はこ(箱)にふ(封)んでこあく(奉)りあるまゝ。
そこにて元のつぼだで「こは用はなし十日ばかりなむ。
草ういりまつりはるまこてゆのき山ゆ入たゝ
つとめるのひるのさ宮城ぞくるれかうこに元せ(給)
し侍りるむ(作公をさしまつる)ろこるを。ほれかりもしうるる
世(申)世ゆるち出たまゝ(ハ)あるこの仏る所まくるこ
たいめんをあり(ま)るん」とはこあり。

柏木忍 女三宮をはじめ奉り見奉る小侍従のかたにてうちひけり忍女

一日(月百七十)のゝぜにさそ(六条院中宮の御)はまてそのさのはゝ(ハ)ゆ(ハ)わけこ(ハ)て
ちべしふ(五十七女三宮見奉)ぐいこに忍なたるひけんすれゆ
ふべとうぞりぞちゝきこしあ(こうまれあれば高貴として)りくけ(ま)
あうけめこし侍るまゝ。こうまく。
よろにみくをあめはまをもはまゝ(ハ)高き花の多
小侍従ゝかへりこと(お返し柏木女三宮を女子にまうけ給へる足なきたるゝ伝もゝ)
一日(月百十九)をはまゝ(柏木はゝ)ゝ(八条院)ゝ(ハ)ゝ(ハ)ゝ(ハ

今さに交ふ色いでう山ざくらおなじぬ枝さく
ろのけおとこのひるまさこと成とあり。

源氏忘朧月夜の尼に姿をかへうをきさ。ゆてはの月しゆ夜

月下九十二丁オ
あ[illegible]よをよろにおこのめやすき其浦よりはれ
しを誰ゆ〜なく〜にさ[illegible]る世はさぶあま成。
源氏しのぶ家氏のろこ[illegible]ぶ〜れんこと
ん[illegible]りひ作めく今までたくまさてぬ[illegible]ち
を〜さ成完〜すてはよ[illegible]ざり〜ぶ池はろこう
源氏の八重紙をかへうをすること
けうらにさるべしうはとあはさにあん能ぶ桜
くさ〜ゆ〜り。

学ゆきこと八家
多一半ゆひ〜り
しふ〜ふ〜ぬと
宮ふ〜り人も
学ゆきこと知
ゆ〜りこ〜り。
ふう〜ぶ〜こ
の学ゆきを知
なる〜ぶ〜そお
くれゆ〜ゆ〜ん
げふこゆ〜諏
仏とつ〜〜
う〜〜ぶれば
のこふもこふ
ば成方法ひ〜
ゆ〜。

月九十二丁オ
朧月夜忘浦のこ〜
ぶ〜ふよ〜ゆ〜身ひ〜ゆ〜ぶこ〜ろ待ひ成。
ゆくゆ〜ぬ〜ゆ〜ゆ〜ゆはゆ〜ゆ〜ゆ〜ゆ〜ゆ。
あゆぶはに〜ゆ〜ゆ〜ゆ〜ゆ〜ゆ〜ゆ〜ゆ〜ゆ〜ゆ
いゆ〜せ〜忘浦一切衆生に普くたよりかけ四海ゆ〜〜〜

論

あれはそうぐにこそ思ひやらるるまいの世かさびし

氏は孫を思ひやりて

くれもはず思ひるるこあり

源氏は四人はあさきをと

うらめしげなるべしきかぬ

うらめしたるなり

ごほうぼうのめの食ことしくれたるまるわざにあん

あどをしへ家をたるるて。

柏木

柏木は病なりとあり

今をよりにあり

女三宮は

らぬよう侍るるさるまれのづの

女三宮は

いにはみくとぐめさせ

柏木病をなる

しう人間食交

いどこまさこと

四吊もあどき

とうくを侍るれあどばこゆるいどうわまけ

きだをふこえこれのおさて。

いまをとそえんけり見れすばるまたぬ思ひ

けるはやけこん「新とまにけるまはせよ」けどあ

て人やりあるぬやうにまどはん道はひのりに

し侍るんとおこたるよ。

女三宮陪

うてりて

内七十ウ

こころどるうきて解のいでこの世をまぐれ

はのりのこころんとあるを。

内柏木は文は望をんてき

只打ほうり茶
しめやうこと

立うひくきこゝやまの（柏木におくまハせしとこ）
けぶりてぐにたてるぐるやまぞ」とある歌に云
じけるとかたりき。

又柏木君よりの　末期せふこと

月ハイウ
ひゝへのきさうけりてまりぬと云四あるか歌
たちもとゞまるまでゞ（柏は煙をあらんタのタ）
（源氏ふれいること）
いとゞめおこしさせ給へ。
（まゝこ文源ハとゞめをけゞとし死後はをきはけハのひるのきるのゞ〜ふつまこ）
（柏木だよりひゝへばたこひるのゞ）
たゞ物ありてゞのひるのきこ云歌たゞよ云絶ずとり沙き
せたるへ。

氏贈答歌文ことゞ
はきさゝえん方なし

月ゞくハ北方へれ
はまもせこと

朱雀院　廿三文の院方、筆とろうゞと、
（まるもせもとてゞくきるはみ）

横ミニウ
春は野山霞をたゞくしけきゞ心ざしをのくぼり
ゞきせく侍るゝ。ばのりにあり。
世はわるゝ入るゝ云をたるとゝ云ゝ雲をたた
ゞまよゝとゝのゝふわゞにある。
（廿三を尼にうりまきハうのまゝ）

冷泉院　八月十五日の秋、六条院へ
（まゝこせるゝ市文）

鈴十二ウ
雲ゝ城のけゝるゝたるすゝのにゝりのわすゝ世
ぬ秋ゝよの月ゝゞくゝ。
夕霧　落葉文歌けこりて
（ほうけるゝ）
ゝこゝくゝあくまゞ云

対をすてくるにやしたくさんおりやうふるるゆきなり

青十八オ

西しひ絞つまを多き袖にぶぐめわかさく吾こゝろの
らまどはすくるれ。はつ船る事丹をとのむ。の一夜
たぐひありなりと。思ひなくみしよを。をさてるより方
ちぐびのうれん。

又同忍より

同廿六オ
あきまの一きれ。城乃谷りあつはいこゝろ。
つまみきにとりてうりてまげれ白たりひもまゝゝゝ
ゆくひるぶるんも。ほまぶりぬべけを。

せくかゝよ沸くぶ忍人山河せなぶ。元丹谷をさ法て丈

落葉文師　母病息所師うりこと

居架文にけりぐ。
こゝろくしのまこ
たけりげるくなりにて待るゆゝふひよわつり紛へる。
同ウ四悪所丹四病気を居架文丹ウ
をりまてゆいけぶ。
落葉にりみぶりさぬこ
ぬさまにりのしあめまぶ。乃紛へわぶ。ひて英ま。
乃わぶ。ひて母乃丹つきのまこ
女郎花をる理丹ぐさく一枝ぶり丹病丹の乃人
夕勇忍佛このりこと
同廿三ウ
いとめづしきされ乃をうるしこれ。こゝろふ小式
ひとよぐこりのひおのもこ
けれとぐめをなんいふきこゝめ。ゐるこふこの。
秋丹理の草丹ぐ。げこをわこ。のぐ借病丹るこち

ひとやうり
師云給る物をえ
俗をいと手だ
れりあてひさすら
にこころをこれ討に
てよろづめを其
さに用る辺にて
そもべの吾に於せ
たまへ罪をゆるさ
まれとうく成
あはぢだらぢたす
らに行るあで罪
にの一めにやと
いまし。

いとすびやませ。あまりめ冥利えをあるる長あるしけ
まどぶのべけつまそひまとやごまりにやぶあり。
『朱雀院 ㊀息所 落葉宮を法ひろる巻。
㊀世七十ウ ㊀息所の
ひごろわりくれやさ行ぶ。さてわるけまどぶま、例
さよりく病あるさまま
をあつう行さ。まいをるまひちちか
うくなむ。うれをひるきこと林ぎ。さるりのまて巻ひ歌
いのふんるさぶ。れるのるなむあはまこころ
ぐるしおうべくけ世ことわりるだぶ。あぐさ
めるさまへ。

㊀四十三ウ
あはまを成をいるこのひぐさあんあるやうひまれ
にわこのぎ冬ーてなそ
まりたるるり。
まやうりさぶれぶ法のれぐさこうふけま。
夕雾巻法ひりこと
上四
いぶをとこのわきこれぶあんきこのるあも尊蒙の
うくとみぬよ成ぶ。ぶ楽うこうありけま。
殺仕りれこぐ落葉宮まる
らせりるこ。
㊀七十六オ
ちぎりあまやきを成ぶよこぐあれをこ衣をれりひう

ひけはやこそこの
ぶ手がんまぶふる
ぶべ。

夕ぎりの巻。落葉宮に心を法くーまる法。子成て ㊀息所乃
にわこのぎ冬ーてなそ
まりたるるり。
たまひけるひかをまろろ成れめろこりたまろ法

らめ　とさく　ぬ　ゆ　ゑ　し　ぬ　る　で。

秋好中宮（紫上さきたまひけう社。ほぎもの〜第一さるつく。）

法廿二テウ

このまこはつる野辺　秋うしとやかさ人は社又ぬれ〜

ゆ　め　ぞ　り　け　ん　（紫上八春にんをとめありしまし）　む　と　わ　り　に　し　ら　ま　侍ぬる。

紅梅右大臣（白えにかまちれる我。にのまつ〜まろ紀文。）

梅十三テウ

色とかこのれるはつる色どの袖ふまぎ色ええ侍ぬ名

我やちらさんとすもしらしやあるものこそまあや

このにおさてゆつり。

薫君（ひかる〜氏姫子をけさこ〜て。夜侍ぬ

みりゝ一ぬしりのるけ〜ゆ。）

竹十四テウ

よべ　ぞ　ら　ぶ　ら　ご　の　ば　す　ま　り　し　を　ま　へ　く　い　の　に　ぬ　あ　ひ

（ひかる〜にも乃さまをくれたほ〜と）

けむとみたるつとわがうつの仏ごのちにかまく。

はすに。

竹河ものうちいでし一ふしにふのきふぬをはたらまや

（ハウ）

夜侍ぬ〜ぐ〜て

よべ　ぞ　こ　ま　ぐ　ら　う　る　ま　や　を　る　ま　ん　へ　く　ぬ　ぐ　め　ま　ま　こ　も　め　ま　し。

竹河まの我小ぞ〜ぬ〜ぬ　ぬ　ぬ　

ゆゑなき 師云、べきハ一なるべし。後世の人のをさ丸語のまぎれ[illegible]ぞ[illegible]ぞ[illegible]ぞ[illegible]語きるなり。

ゆゑなき方にて
師云、あかまとゝふ一言もいふ者ハ人にのくるものゝ事ハ考すべき事也今あぎとゆきゝゆゝしき方にてゆゝしほのうにあはまと思紛ふ夫を恋ふ方にもあらじ。只ゆゝしき方にてゆゝ知たゝとゝふ事なるべし。

ゆゑ[illegible]ぬ[illegible]ぬ[illegible]ぬ

ことをいつて河に入を
はくぐ・又ほのか
にとりつるゝんそう
ひあり。
死後おぼ・に情有
むけんすぶ・ひく寺
ら死ぬる事ゆえ
いそうを侍まし
ばくく。

いくるせけ者に者に入にるのやすぎおのでやゝまん
ぬ・ひてくこ・ぼのけうへ（条礼を数るく史記さ云）にえのけのよきぶんけわど
ぶし思ひ者まへまりこのぶ・ひくみちにえ・ぶうぶ侍
らるゝ「ばすぶ」ぶるよ云〻

薫君（けう佐ふくあ中しさ無ども此のふさまば乱乃ちひてこれ雑ゐにさくくある。）

橋 世九ノウ
ば姫ぶ此ばくくこ高潔さ寿さをのゝ・ぶくよ
袖ぶぬまぬるぶ・ぶのめたまふんの「ぶて云〻

六条院このてりこと

同 世一オ
さくこるる宣法つ川長あさ少の事や袖ばば

あいるくハ師説な
何ぶ・わきまへ
えず・にうちつ
けるまするる
ことゝり。

はつんぶ者ぶうぶ「ぶ・いとれのゝげよこの後世
まつり。

このをるけ思（大弓にきこて紗る 此女）
同 世一オ 卒示にやがぶ（ぬまんこそゆく）
うちけ・ぶるやうにやよ
つと言ふこのるえくるゝ
こゝくはけるやうに今よりるみすけるへえんや
すくぶがゆるすぶくまむ。浮山ごをりはて侍
らむ日かぶ・えうけぬはりたきくぶやをの
（ぶ・ぶんとこゝろ）（そ尼之始るにおるつ中之世ゝにはゝ）
者ばるひ・ぶ・ぶるけ侍ぶ。

故柏木忍法師

ありて、年々しく、元のるてやうに、
このそる大羽にまわりせそう紙。

四十二オ

病を[illegible]りくこのまりにてまるにもつこしほのか
[illegible]て元ぎさてむとこのてくなりぬるをしのうら
思ふことをうひる事とり[illegible]このくもをのはるく
おはしまするんぎ。[illegible]ぎ[illegible]この[illegible]さと紙み
ちけくふこのみ。又六いまいまをぶ[illegible]ものやさ
ゆうりけあとれやうにたのをくぐ
めれまに此女紙うもくを元ようてわのを

[illegible]

[illegible]

たまぎこの[illegible]ぎ[illegible]ぎ[illegible]ぎ[illegible]ぎ[illegible]ぎ[illegible]ぎ侍る

二条院ぐ元。

[illegible]ろめうう思ひ事とのるこの

をなけまで。

いけちあぎうまとを元ぎる人まで岩根よ

ゆめ[illegible]松れれひ赤。のきけ事をやうにぎぐう

ぎはうて侍従れ元にうくにのきけをうう。

白文

[illegible]

推七十オ

山ぎうるぎはあるうに弱きて同ぐぎ紙れ

てくるの紙野紙もつまり[illegible]をけん。

上同

八重咲のうつくしき

このぎしゝる花はさかりに山のぞけば垣根越す春

は旅人。野辺わけそしる。ことはのしげきらう

らうしくうかきあつり。

白菊　しぐれがちなる秋中なに。

同廿二丁オ

秋の野に松虫鳴くこはぎ原

はゆふぐれ。たゞ今のうれはしさ。ちぬの

ほうあん。あるかんばさ。ふくうあるべきか

常おさも思ひよりてきてふくほうるくうけ

きゆくみべをわきくれのめるはみなこも。

同廿四丁オ

あさ露に夜まどはせる麻はまた大のうにやを義

はをおくをろうろうをだくるまでくうろうめを

ぶ。云〻

薫風　大ろはれるまを。

角十九丁オ

はをびけやのはこ。ろうろうきぶんの。人元いのに風

侍りん。

大意歌　父まれ眼をぬぎてうのけるあるいやまにうのくるやまにひにこ

同ウ

今をとて。わぎ。すて侍りしほぶけんまぶひて。

ゆくゝ[たもひ]ぜゝ侍りて[うゝと]なもいのゝ[あげぬと]ぬ。

このをるけ[ゆ]ゑ

四十四ウ

よべ[ゆ]まんと思ひ[ま]へ[ら]ゝのゝ。[ゆ]ゑ[ば]ゝ[の]ゝけらゝ[ゆ]ゑ

[大男のゝゝゝ

落葉文

寄世一下オ落葉ぜざうらに代ゆまりて

さこのうらもこのつゆ

侍る

ゆくすえ

中忌

同世六ウ八月廿三日

一ト日

仏

昔を思出りはずをおき人のゆくめつ

このにていと

この歳の

侍

中忌

自をしきばかりなるものをあるじかくしてわりなきぬ侍りさうらん

「のろる本の名きりけんぞの三云

四十ウ

しかぞ〳〵にわけつるを見れば家のげこむの松ぞゆる枝れ
そ〳〵の風だにけしきをしるべうきをぞとりもぬつ
らさはさうもんまこと〳〵きをむこのをぐるべうり。中略

とのゐどの内〳〵さぶらひの文ききに

又侍をばれ又侍〳〵ぶ。

同 忠 こまれこるをきにろナぐきこ〳〵ば。

四十二オ

同 法師ものごとの松ちまちまんやあ里にうて。い
かゞ〳〵答はあまぶりに。まどひなるほどにあれが
たりをこ侍りつるあんのこれまん敵。堂になるす
べき事。あるりにあり〳〵侍りき。れいゆる

四十

侍りてこうをぼのにうにすることをえりあり侍り。
無はあまにさるべきなかせごとをぞこのはせ。
ぶある。

中忠侍ことり

山里はありおれ。うやまし〳〵を侍るの松。
こをばをさうにくこうよくこと思しへ〳〵
にてをかき時を入りをそかをとめさうのうんより八に手をもせがしこ
かくとこうよもりこ。いちばの中をよあんよりをあし
まつものこう思侍るをいのきるにをさるべき
さまにあるを紙をぞたうの行ぞるん」ときて

ものまうす。

常陸の国方

東五十ウ

すれば、こゝに侍りて、こゝの事、しくもおとこのまさりて、
四方にうちはらひ、つるぎにもさこそさこそ世ぬ城つ
かれたりしかば、
たゞしもべさこそと侍りて、もんぜ一所ぐさせんと思ひ
あるに、ひとりすけびくさぶらひ、ひめぐさ、のうれ
れいたくいとをしくうきもの、ものがれ
ぬ身ひとりのこのげさ、うくれをあくずゝ表なること
はなれぬわかく侍世あまざ、たゞりきうに

はゞめぐ、あはれとうちはらひ、かまくるふ城、云く
大浦よりれのりてこと
四廿丁オ
さくぐこのれるれたいはのくろへたる所しいでく。
こゝもづつのしげるのあれどさてもすぐい給ひつゞくハ。
あばれれほぐ、こゝひ法のはす法。

常陸の国方むるの中将

17五十二ウ

城ゝ小林ぶをとくあくる世、ハ家もんけわのぶぐ
あまいのでぐ、ぶいうぐおくさせあさくめんぶし
ひとり。

浮舟はそく、
日五十四丁オ
いこのにつま〜にみ
たへのびろうとも
〜はびろ〜ゐへ。
浮舟君はこのうとく
日ウ
たも〜。ゐもの。
ひぶるにう所のほせにあ〜ぬ所と思はせ〜ゐ
同君はそく
日五十五丁オ
つ〜ゐ
ごろもめや〜きゐ家に。
浮舟のこ
多夢

宇治里ちうらきこ
もいとんぐるく〜
浮舟をこ
このばるこにわ〜
なをこ
よ山ゐるに。
なをすくま
ばやすくを。
荒〜しき山路
ゐと待りしとよ。
この残るの
宇治より京へ出る道に
たてまつりある人文。
日六十五丁オ
まぶありあばぬ。
佛はにおぐり
こ
さ〜ぐ〜ゐ
こ
待りて
物
長
明日
今日
ゐ

[illegible]

浮舟君

浮ニイウ　走ーきく

わがやつのしかくてどーをくるまに[illegible]ばうまけるの山男よりの[illegible]

せさこうの峯れ霞見絶間かくく」かくてはーみ

[illegible]　わこの見れれるよにあやーう侍めまでの」にこの

おこり。

右近

[illegible]

わーあーたるりて何のさふふ嫁[illegible]にわるこに

をいかにたれりーき[illegible]ふこびれわく侍んこて

[illegible]

[illegible]

[illegible]

四人（保母を石山にまでおくりそ。京北野の北人を、其人ども、ぎをみの三郎にひきまゐる文）

月日ニテウ

よべよりげつがまし。さを行ひて。ふくらをしさこそ。

桜がりあげくめりしかこれより美みさわぐ。

月日ニテウ

見てさを行つまこまを。今日ばかりはしまをたまへ

とく給へ。のみにく侍る。ふくらをしく。

色はさまざまげはやうにみるてまをたう侍る。

大夫殿文（先に明石中宮御事と申さまゐらせ侍る。）

月日ハテウ（白き紙にうちくだきしまゐらせ）

あけぶの桜がつのまる。まゐらせ。まゐらせ。

あるがまゐらせ。（参議一条殿）まゐりまゐらせ。（三条の殿）

げ御殿。（ものの）

云々

月四十四丁オ

見ひ。（宇舟殿）

こどもの。ひ。ひ。ひ。

ほにやをしてはこ。

水まさる。

さてこそ。

まゐりて。

師長、古今物名に、
問る琴の琴は
まづ上に有るほ
きけどもうつも
なほ分かぬとよを、
うみ説玉小櫛にこ
ゆ言長けど分
せり、

浮舟君　白文はせうそこ。

日四十三オ

のさてしはまとせぬ琴は雲にらきて世間の
浮み枕をうさばやけまづ「とるば」とうとうとうとう。

云

日十三ウ

こゆるはれ　浮舟の流れ
けるかの
こぶりと思人待るはわるとるさきはりてわやくく
浮舟をとるべきうんかはきもち医にたらず
和也。此かぶらくはくしづくさうがうるる」
能とあり。

句文　はもの同じく
浮舟ひ

浮舟君を語せんとの
いとおかしたづよりめぐ。風はるびうもたをよしろ
（まつ）
めくるあもぬてこぼまもりてあどの侍る。
う成るはれ　白文はれるをきくに今て浮舟の
ものとはつうはけるの文。

日五十七オ

能とあるうとをあ赤はまつ侍むはをき
思ひけるうの人みわるは世給ふれ。

句文　浮舟をあ
はるの文

日六十五ウ

うはれ　この能もはもも　浮舟をあ
盃は（おけんさまの先下らるるとにて
さんはいはすはさんはこの
きくの
もの　浮舟をあ
（えれ中ろ中ろ中ろ）
あるもまはこうるはび折れ。

立ち寄る人の
ゆりとは、孟津抄
に茶と出さなり
り此歌会にでこ
しやとそもある
ア、

浮舟はて（浮舟の美）
孤なる程は美にいとさまわのしく。尼て紛ひにはまバ。
才能所うみせさせ給ふ。
うちぬ（浮舟の）まぎれて侍るやがくうは美
て侍る美に人のつ（故は）
ぎ。やがてうさ（浮舟のこと）
紛へ人（立ち寄る山里の人）
しらせ給ふ人は（オボ）ゆ
（浮舟は）
しげ。を（浮舟は）
（浮舟は）

四十六

（浮舟は）
将は（浮舟は）
て。（浮舟は）侍ま。
（浮舟は）
（浮舟は）
（浮舟は）

ずりのにわうはまきたくこゝろをまいるべし
らうて侍る成あるほうとたうろうくるはへ
わらうせあはんことをもらのくまをどこゝに
むこのへ寄りてんけいを雨ふり侍りぬべりれば
あり。

よしほうる（浮舟はしめくくなりしまし後）
（日よりなれ）
掘れあをうあうりをほるをぶしてすしく
べりけをわぞしはしをうりさあり。

菫見（浮舟はしめくくなりし後）

（同年）あさてまるしまるれやすひし
をはけどまるしびあこくもと思ふぞ
いこの侍るやうにこの。浮舟はまたまふんかしうれかぞ
成すぐしはるをぼのかくくひぐろを見はける
とぞあるおよのつ孫あさをいくぐ田ひけどもも
うりかくすくう侍る成田ひけおとうにをるのくへ
（浮舟のうみとつひに同あはまにのりうれもいと合たり）
ものすしさうあぐりはこ。のるるずきうべきこと
（たまくしとられ六月はまるのこにせとうこと）
ひをはけるすあく。
（浮舟在生にてうほ一本に同せとうこと）

浮舟のそうれのつりこと

同世二十ウ 浮舟ノ尼ノ手ニ

（中の五）侍らぬ人、所がら、いとうく、品の程、
へ給げ申侍るに。（若君は清涼殿をいとはばかりぬべき御ものいひ、人けなき所を侍はよおきまゐらせ）
（ひ侍るよ）
いやとかん。（若君学問を侍はよおきまゐ）
まへ給のらず。
ぬ君。ほうさ、ふさ、紙、みを
（浮舟は、手ずから、ぬ、筆ひ、才ひ、ひ、なりひ、ふ、）
に。思ふ、給へ給ら侍。（あくまでうんとのこまれ）
ぬ身はたらう
赤なるのくだけ侍こと、ふ、ひ、ひ、ひ

領
やうじたるものの（つきまくさまめかに正躰ゑう〜〜〜）
京にいくたまはげらうあめまし（僧都就だう、）
あぐ〜〜あ〜ゑん堪ゑん〜〜
あむ。」（くまでかけさんゑうハ叶小まぎるに）
「なるどいうじ　おとこ就のきたく云〜

（ナシ十オ）
尼君（小将なる人手習君に心就うけてあづけ
やら小方就よう云てたこせるうてし
世間就人を仏ぬ人ゑ何ゑもふうひゑ）
「ぬるまぜ　やうにぬ　ぬ人ゑ　ふくなし
うたてうあるこ思ひだれぬ女郎ゑうゑ世就うむく草就ゑ

小野尼君に（ゑ〜〜ひけ君の
ゑ就ひやりける文
小将
（ナシ九ウ　むう〜就姫君好ゑう今就ゑ習君のゑ）
よべまこうしく心みだ〜侍りしぞ　そぎまこので侍りし。
わすゑぬむうれこ文ゑ作れつきみ　いゑ吉

四十九

ぞあこのまこけるぞあ（手習君就思ひ〜ゑ）ほどにゑいひさ〜なまへ
むしゑ　堪君けるぞきほどめ〜ぞこゑうたすもぐ〜きやうにまて　いゑぞ〜いしゑんやゑ
ゑあさ世ゑあ〜。ぬ（堪君けぞ）ぬ　ぬ　ぬ　

手習君を出家させによりてあぢきなくのうて迷惑せしとこあぢきなかと
い無益なるさとえ
とてさい法師の人伝
出家せむるあ、
功徳あるぎに成
うとうてのさとし手習
君いかなるけ因人た
ちよりてし、

第十三オ　うまぎる君

よべ大将殿は使にく小弓やまうでするつし。手習君の弟

子習君の始まし　ひんうけぬはすしにあぢきなくうてれて

ことはんうけぬはすしにあぢきなくうてれて

侍りてあむと。姫君に手習君し

さすべきことを見れば、

参りたとし

さふしぬべし。

同じ人

字毋忘草　けはけ因文

けさうに大将殿はりのしまひくにあり

けるとに行あるよべめとりあて云ふ委くおこ

えう侍りぬ。因果とし　因中、はうむき

あひくあやまちを山賤の中にすけ家しぬるこのへ

ひくを。佛はせあうこうをくるあを引きさ出家うまとこ

はり鷲よ侍るいうりぐをせむもとはにちぎりあや

まちを行とであいはしふはつこ様どるのしのひて

一日はすけ出家のくぶ功徳ぐくをばのりあきりのうまぢ

るほくこのまを行てうまんうしてきこばうう

さふひくを侍しんのたこはは小弓おとく行ひてむ。

この知る大将字毋忘草けはけ因文ひりあきらめたまひてうちたうはしける因文。

日十八オ　さくにたちやまとかしさ

さこに写うんうくをくまをうたりよばん

吾ものゝ云、
師云さまゝ吾にうきすゝ〳〵我がくまで
思ふことゝ我ものゝ
ま吾人がりどすゝく
思はるゝ我まして
人めるものゝ。

をぞ。師云俗はオラビクよめんでてらふくし
俗はいとゝ冷きいのであるさ
まゝこのゝし世は夢このゝ紙だるの浮舟ぶせまほしてゝ
あのゝこをどこのゝまおこるもだるして人めきいのこゝと
この二さもやり行ぞ。
うのけゝと愛ぬるる絶ちるべくにくやとぬ山にふこ
まどふこうけゝしゝ世。こゝやわすまゝおひぬんこてゝ
なまをすの浮舟のうきこゝる今日まてこゝ
へあこさけるこみにかるのうてるだ。

未廿丁オ
源氏君 未描ふ君にもじめてあひうらく、
作よめて作のはゝける作文
夕雲ものゝ君にあはまほしくあるよゝ
ゝ
待遠みわばすむさし
「雲間まもり出むほどのこのたん
「あめはまとあバあるまるんをおほせどゝのほまをこのに
こゝ作し作ゝ」。
冷泉院 秋の比宗氏君の本弁に桂院よど作ゝせ
あひけるにつのけゝける作文、
凡廿一丁ウ
月はむ河はもゝる霧なまるまゝこのゝ作ゝ
ぎるけゝどもこのゝ
夕雲君 源氏作女作集所の歌る
むゝまゝ氏作ゝまゝける作文
夕 四十六丁ウ
いとゝこゝるゝ作ゝのすゝをあけぬるのゝ

「いのたゝふこのたよりかんなきの山のうよさかつるたよりの跡

めくるこのいとひまとのうへよりかけるしたゝやこのい給つん。○源氏君より以下ハさたるあぐでなりしをあや
まちて見たるたゝたゞしらるあぐ、

小萩この巻　畢

大坂書林　宣英堂板

橋本稲彦著

嵯峨文藻錦

小木

全部八冊

文藻をかく人のくあに源氏のうちのかれめあてきなりくさ〻ら葉とくさをぬきいでて類聚しかくまちりされも文藻のこゝろ〻〻ゑ所よりもきえ麻句をかるひめくらさんみそよりゆたりくとよ多くのくとくまりこ学者の笑をもそ備ふ〻さものく

○初編二巻二冊

春部

初春、子日、鶯、霞、春雪、餘寒、梅、柳、春月、春夜、春曙、帰雁、花、山吹、藤、暮春、春雑、

夏部

首夏、新樹、若竹、郭公、夕負、桂、五月雨、蛍、夏月、瞿麦、水鶏、鵜川、夕立、納涼、灯火、夏雑、

秋部

初秋、秋風、萩、朝負、女郎花、薄、露、秋前栽、秋野、秋夕、秋雨、雁、虫、霧、月、菊、紅葉、野分、秋霜、秋夜、暮秋、九月盡、秋雑、

冬部

初冬、時雨、落葉、霜、冬月、千鳥、豊明節會、霰、雪、網代、鷹狩、冬梅、冬雑、

○二編三四巻二冊

戀部

雑部一

雲、雷、風雨、空、山、川、海、宮殿、居處、荒涼、人事、奉公、行雑、盛衰、交、言談、寝床、

○三編五六巻二冊
雜部二　容貌、人情、懷旧、　同三　賀、婚姻、産養、嬰児、離別、旅、海路、病、物怪、哀傷、

○四編七八巻二冊
同四　尺教、曼、飲食、器財、衣服、　同五　神祇、公事、音樂、才藝、遊戯、宴、歌會、学文、文筆、教誡、評論、俳諧、

同著
紫文淵息　源氏のうちの淵息文をぬきいでて傍注をそへ淵息をこのく助とす　小本　全一冊

同著
淵息文栞　えそらくのうちの淵息をちからくくあげたる　小本　全部四冊

文化四年丁卯七月

越後屋都書林高橋

書林　京都　額田正三郎
江戸　須原茂兵衛
同　西村源六
同　宗七
大坂　葛城長兵衛

茶花の図
全一冊